

生命力がある農業システム 先人の想い受け継いで



6/22(木)の現地調査でトラスト地を視察するFAO科学助言グループの李氏(左)

GIAHS認定の5基準

「武蔵野の落ち葉堆肥農法」の基準ごとの特徴を紹介します。



SDGsの達成に大きく貢献する可能性を秘めているGIAHS。各項目の写真下にあるアイコンはそれぞれに深く関係するSDGsの目標です。

①食料及び生計の保障…多種多様な農産物の栽培と都市近郊を活かした農産物の販売、農業の6次産業化への取り組みが行われています。



さつまいもを使った加工品

②農業生物多様性…堆肥の原料である落ち葉を採取するため、人の手により管理されたヤマが、希少な動植物の生育環境を育んでいます。



ヤマに群生するキンラン(環境省レッドリスト絶滅危惧Ⅲ類)

③地域の伝統的な知識システム…農業者が住民とともに行う落ち葉掃き。落ち葉の集め方には伝統の知恵が詰まっています。



1~2月に行われる落ち葉掃き

④文化、価値観及び社会組織…多方から入植してくる開拓農民の精神的なよりどころとなった菩提寺が今も人々の信仰を集めています。



開拓農民の菩提寺 多福寺

⑤ランドスケープ及びシースケープの特徴…短冊状の地割の面としての広がり、特徴的な農業景観を生み出しています。



短冊状の地割とグリーンベルトのように広がる屋敷林とヤマ。

三 芳町は美しいヤマ(平地林)、江戸時代の開拓の名残を残す町として知られ、多くの農家が伝統の「落ち葉堆肥農法」を受け継ぎ、美味しい野菜を生産しています。

「この農法には生命力がある」。

FAO(国際連合食糧農業機関)科学助言グループの李先徳氏(中国)の言葉です。6月22日(木)に実施された現地調査で、武蔵野の落ち葉堆肥農法が若く情熱を持った農業者に継承されている現状に触れ、当農法の持続の可能性を「生命力」と表現しました。

落ち葉堆肥農法は、土地を屋敷地・畑地・ヤマの3区画に分けて複数の機能を持たせ、地域内の資源を最大限に利用した伝統農法です。

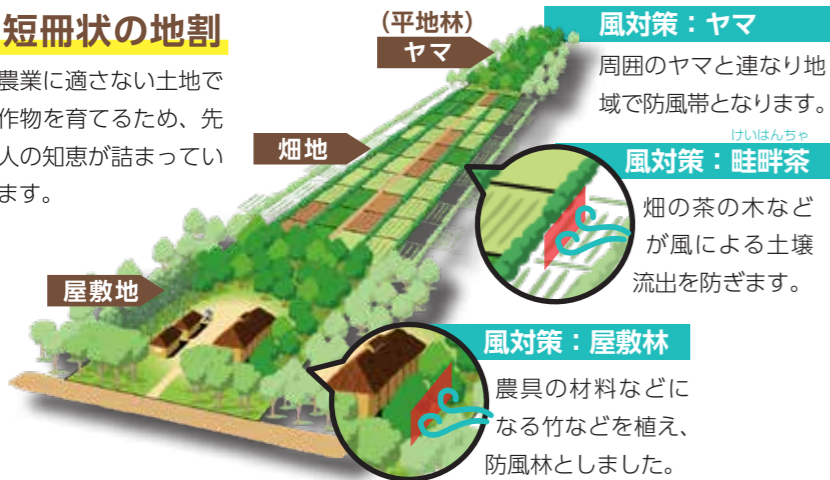
三芳の地で先人から受け継がれてきた「生命力」があるこの農法はFAOの書類審査、現地調査で認定基準(P5上部)を達成し、この度、GIAHS(世界農業遺産)に認定されました。

武蔵野の落ち葉堆肥農法

農業を行うには非常に厳しい自然条件の土地で作物を育てるため、一軒の敷地を短冊状にして屋敷地・畑地・ヤマを配置。ヤマには堆肥に適したクヌギ、コナラ、エゴなどの木を一から植えて、落ち葉を堆肥化して土壌改良を行いました。「低炭素社会」、「環境保全社会」、「自然共生社会」に貢献する持続可能な農法です。

短冊状の地割

農業に適さない土地で作物を育てるため、先人の知恵が詰まっています。



①低炭素社会の実現

光合成で二酸化炭素(CO₂)を吸収した葉を燃やさずに堆肥として土壌に還元する、炭素(C)の貯蔵庫のような役割を果たしています。

②環境保全型社会の実現

落ち葉を廃棄物として処理するのではなく、堆肥として利用し、環境を保全する側面があります。

③自然共生社会の実現

ヤマの落ち葉掃き、下草刈り、間伐などにより明るく、見通しの良い林をつくり、生物多様性と生態系の保全に貢献しています。

FAO現地調査

6月22日(木)に実施した現地調査。多くの実践農業者、関係者の協力がありました。

- ① 調査者 李氏、三芳町役場到着
- ② 三芳町役場で農法の概要説明
- ③ トラスト地視察
- ④ 旧島田家住宅で実践農業者から説明
- ⑤ 上富小学校から地割視察
- ⑥ 実践農家で堆肥場、畑地、ヤマの視察
- ⑦ 昼食。農産物利用のレスラン視察
- ⑧ 木ノ宮地蔵堂視察
- ⑨ Pasar三芳で農産物販売状況視察
- ⑩ (川越)実践農家で堆肥場、畑地視察
- ⑪ (川越)ウエスタ川越で調査員による講評
- ⑫ (川越)レセプション・伝統芸能視察
- ⑬ 現地調査日程終了

